31 度目の司牧の旅へ

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

司牧の旅

ローマ法王フランシスコは、2019 年 9 月 4 日から 10 日まで、31 度目の司牧の旅を実施した。今回はアフリカのモザンビーク、マダガスカル、マウリティヌスと回ったが、アフリカは今回で４度目だ。モザンビークの首都近郊の町ツィンベートで行われたミサでは、「暴力」「報復」「投棄」を非難し、これらが「いかなる家族」「近隣グループ」「いかなる民族」さらには「一国家」にも未来をもたらさないと述べた。

法王はとくに若い世代の行動を鼓舞した。「腐敗」は、すべての社会層を裕福にしようとする国の発展を阻害することである。貧困者に近づき、協調すること、とりわけ宗教者は足を地につけ、活動することだと述べた。なお、法王は平和のシンボルの木、バオバブの植樹をした。

法王は 9 月 6 日、ツィンベート病院を訪問し、挨拶の中で次のように述べた。この病院はローマの聖エジディオ共同体が経営している。

「私は、女性や子供のエイズ患者に際しての、あなたがたの専門的知識、職業倫理、病人を癒す愛、歓迎する愛を見るにつけ、『聖書』の『良きサマリア人』の例え話を思い出す。あなたがたは、『この病気には勝てない』と匙を投げ出さず、正しく勇気を持って解決しようと対処されている。主は、道端で暮らす人間と共にいるように、このホームで暮らす人々の傍にもいる。がん患者、結核患者、若者や子供の栄養失調の叫びを聞いてもらいたい。地方の病院を活性化するために、貴重な協力を提供する各種専門家の無償で自発的な行為は、人間性と福音の大きな価値を含んでいる。」

シノド会議

1965 年法王パオロ 6 世によって提唱された南米のシノド会議は、枢機卿会議に次いで、法王にとって大切なものになっている。現法王にとっても気候変動は「家族」「若者」についで３番目の大きな議題である。本年のシノド会議は 10 月 6 日より 27 日まで開かれた。参加者の内訳は 28 人の枢機卿、29 人の大司教、62 人の関係市町村の司教、44 人の一般司教、21 人の宗教者からなり、合計 184 人（そのうち 113 人が汎アマゾン地区出身者）。一般市民からは、スリナムより 3 人、ヴェネズエラより 6 人、コロンビアより 13 人、エクアドルより 7 人、ブラジルより 57 人、ペルーより 10 人、その他の地区より 6 人である。一般市民の中には 17 人の土着住民の代表者がいる。そのうち女性は 9 人である。出席者全体だと女性の数は 35 人となる。しかし、教会の重要問題については、慣例により、投票の権利はない。

シノド会議の中心は「気候変動問題」である。新枢機卿のクゼルニー氏は、イエズス会の月刊誌『チヴィルター・カトリカ』に次のように記している。アマゾンは 780 万平米に 3,300 万人が住む。300 万人は 390 の異なる種族やグループで構成されている。ここには恐ろしいことはたくさんある。例えば、「活動家の殺人」「横領事件」「水資源を含む自然財産の私有化」「不法もしくは合法的な森林開発」「鉱物や石油の試掘」「汚染と疾病」「人間の密貿易」「先住民族の文化の消滅」「増加する貧困」である。

アマゾンは広大な森林地帯であるが、毎年かなりの自然火災が発生して、森林面積が縮小している。本年はその火災がとりわけ数多く発生し、その被害は倍増した。アマゾンの森林地帯は青い地球の象徴であり、酸素を供給する宝庫である。しかし、ブラジル政府にとっては、森林開発は、国を発展させるものである。そのため、森林を伐採し、土地を開発し、工場を建設し、国力を増進しようとする。アマゾンの現状を守るために、EU はブラジル政府に経済的援助を申し出たが、ブラジル政府は返事を保留したことは周知の事実だ。スウェーデンの 16 歳の少女グレタ・トゥンベリの発意によって、地球上の若者が地球を救うために、また将来の生活を守るために全世界でデモを展開している。

ズッピ氏は枢機卿に

イタリア・ボローニャの大司教を務めているズッピ氏は、ローマ出身で 64 歳。この度新たに 13 人の枢機卿が誕生したが、彼は唯一のイタリア人だ。氏は、聖エジディオ共同体の創始者アンドレア・リッカルドと知り合い、その共同体に入会。1955 年 10 月 11 日生まれで、大学生の時に聖職者になる決意をする。司教になったのは 1981 年。貧民救済のために活動を続け、クリスマスにはローマの由緒ある教会・聖母マリア・トラステーベレで、ミサを司式したこともある。1992 年には、モザンビークの内乱時に、政府軍と反乱軍の仲介に奔走し、両者の仲介のために活躍し、その和解条約の成立に寄与した。2015 年には、現法王よりボローニャの大司教に任命される。そして今回の枢機卿就任である。これはカソリックの中でも非常に早い昇進である。大司教は、貧しい人に寄り添い、その人々を救済するという活動を続けている。夜は街頭に出て、家なき人々や食に欠く人々の救済に努めてきたのである。

ズッピの家系で枢機卿が出たのは、彼で 2 人目だ。初めての人はカルロ・コンファロニエリと言って、氏の母の叔父にあたる。彼はアンブロシウス会に所属し、信仰信念はかなり厳しかった。カソリックの信仰信念を持ち、真のローマカソリックの信者として行動していた。

今回の 13 人の枢機卿の誕生で、新法王を選出するコンクラーベで投票権を持つ者は、80 歳以下で 10 人を数える。現法王の在任期間中の枢機卿任命は今回で、投票権のある枢機卿が 67 人となった。現在投票権を持っているのは枢機卿の 80 歳以下の 128 人だから、現法王の息のかかった枢機卿が半数を超えたのだ。ちなみに、前法王ベネディクト 16 世が任命した存命中の者が 43 人、前々法王ヨハネ・パオロ 2 世が任命した中では、18 人が存命である。ヨハネ・パオロ 2 世、ベネディクト 16 世、フランチェスコとイタリア人以外の法王が三代続き、イタリア人の枢機卿は減る傾向にある。そのため、今後イタリア人が法王として選ばれる確率は次第に縮小している。